

## シンポジウム

## さまざまな対象や活動による家族看護実践

座長：大嶋 満須美（山口県立総合医療センター）  
中久喜 町子（東京医療保健大学）

日本家族看護学会発足し、大会も今年で14回目を迎えました。この間、「家族を一つの単位として、家族を援助の対象としてとらえ、ケアする」ことの重要性は様々な看護活動の場で主張されてきました。なぜならば、家族メンバーの病気や事故による障害は他の家族員にも「見通しのつかない不安」や「苦痛」あるいは「生活そのものの大きな変化」を与えることになるからです。家族を一つの単位としてケアすることの大きな意味がそこにあると言えます。疾病構造の変化からくる患者自身の取り組みを支える家族の重要性、患者・家族の生活の質への注目、当の家族のマンパワーの低下など、ますます家族を支援する必要性は高まっていると言えるでしょう。

一方、家族を支援する側の看護者を取り巻く医療環境も大きく変化しています。医療制度改革は政府の医療費削減政策のもとで誘導され、病院の在り方にも影響を及ぼし、病院は機能分化されつつあります。急性期病院は高度な医療技術と24時間、質の高い医療提供を求められています。また在院日数短縮化の中で地域と連携した医療体制整備が急務の課題となっています。経営的視点から入院医療に重点化したり、専門外来に特化するなどの診療報酬による経済的担保を求める声もあります。厚生労働省は今年秋を目安に「地域ケア体制整備指針」を示しました。療養病床を削減し、高齢者が自宅や地域で暮らし続けるための基盤整備につなげていく見通しです。

このような医療環境の変化は、家族形態や価値の多様化とも関連し、健康障害をきたした患者・家族の生活と機能に直接的な影響を与えます。看護者は看護の本質を捉え、意図的に関わらなければ患者・家族の抱えている問題も変化も見過ごす羽目になってしまいます。

今回、地域で開業する助産師、公衆衛生、在宅、外来、および病院で行われている様々な人々を対象とする家族看護実践を聞き、家族の本来もっている力を引き出すことにより患者・家族の相互作用、家族の関係性による絆の強さを見だし、家族が健康を回復していく過程の意味づけを行いたいと考えています。

家族が本来持っている力を引き出し、あるいは取り戻し、また育てるための身近な存在として家族にかかわる看護者がいます。家族は家族独自の規範やもともとの関係性があり、そこに看護者が働きかけるには粘り強いアプローチが必要です。そして家族とともに成長するには、ともに共有できる時間と場と会話が必須であり、織りなす会話を通し、ともに育ちあうのではないかと考えます。

シンポジストの方々から、家族看護実践をもとにご発言いただき家族を捉える視点、家族看護のあり方について討議を行い家族看護の更なる発展を模索したいと思います。